

に着くと、早速部屋の鍵を受け取り、まっすぐに自分の部屋へとたどり着いた。通りとは反対の、裏山に面したその部屋は、森閑としていた。まだ九月の半ばだというのに、何か寒々とした感じさえした。そのような時、私は、カバンの中から家族の写真を取り出す。そして、机の上にそれを立てるのであった。それをじつとみていると、家族の誰かが、私に向かって笑いかけてくれるような感じがする。それを見ながら、洋服からゆかたに着替え、「おやすみ」といい、明りを消し、ベッドの中にもぐり込む。そこには、明朝までの熟睡が待っているのである。

いよいよ明日は、大学の精神科を訪れる。しかし、マールブルクを訪問した目的の一つであるウェーバーさんがいなかったのは、私を落胆させた。ウェーバーさんは、女医さんである。十六年前にこの地に来た時もフロイライン(未婚の女性)であったが、今日もなお、フロイラインであった。目下、講師資格を取得する論文を書くために、スイスの山の中に引き籠っているという。

十六年前にここへ来て、はからずもウェーバーさんに会うことができたことは、いくつかの面で開眼する機会となった。すばらしい人間であると思う。次の回には、ウェーバーさんの出会いに ついて話をしよう。

寒 風

風が野を貫いてゆく。どこまでつめたい風なのであろうか。そのゆく所、触るる所、もの皆荒み破られぬはない。つれなやただ一ひら残る梢の枯葉をだに吹き払い振り落さではやまぬという。哀れや落された枯葉の群がまたもやかさかさど吹きまくられてゆく。どこまできびしい追究の風なのであろう。

省みればわが心にもこの寒風はあるまいか。わがゆく所、触るる所、一陣荒涼のつめたさを現じ、苛酷のつれなさを撞にするようのはあるまいか。その目、その唇、風の様に人を貫き、裂き、責め、傷つけることはあるまいか。

風に荒された野は、また来ん春の回復もある。一たび心の寒風に荒んだ心は、また回復のよすがもない。

願わくは寒風をしてひとり野を吹かしめよ。わけても柔かき子供の前に、わが怖しき寒風をして荒まざらしめよ。

倉橋惣三選集第二巻 幼稚園雑草より